

平成 30 年度研究について

香川県小学校教育研究会国語部会

平成 30 年度研究主題

子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開

－付けたい力を明確にし、その力につながる子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする授業づくり－

1 研究主題について

(1) 昨今の社会で求められていること

グローバル社会では、環境や経済、国際社会等、さまざまな分野で、複雑で世界規模の問題が一人一人に影響を与えていると言われている。こうした問題を解決しながら、持続可能な社会をつくるためには、誰かが答えを出してくれるのを待つのではなく、一人一人が考えや知識、知恵を持ち寄り、主体的に答えを導き出すことが求められている。つまり、「何を知っているか」だけでなく、それを使って「何ができるか」「どのように問題を解決できるか」が問われるようになってきているのである。

そのような社会の流れの中で、平成 29 年 3 月、新小学校学習指導要領が公示された。また、6 月に出された小学校学習指導要領解説では、改訂の経緯として、以下のようなことが示されている。

学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。

「小学校学習指導要領解説 国語編」, 2017, 1 頁

このことから、今後、自ら問いを見つけ、友達と関わりながら解決し、さらに新たな問いへと向かっていく、主体的に学び合う子どもたちを育成していくことが求められているといえるだろう。人が生活をしていく上で、問題解決は常についてまわるものである。日常で起こり得るさまざまな問題を自分の問題として捉えるとともに、その解決に向けて、一人一人が自ら学び判断し、自分の考えをもって、他者と話し合い、よりよい解決方法を見つけることができるような力を子どもたちに付けていくことが必要なのである。

(2) 香川県の子どもたちの実態

香川県の子どもたちの実態を見てみると、平成 27 年～29 年度に実施された全国学力・学習状況調査の質問紙調査における結果は次の通りであった。

肯定的回答の割合	平成 27 年度		平成 28 年度		平成 29 年度	
	全国	香川県	全国	香川県	全国	香川県
国語の授業の内容はよく分かりますか	82.0%	78.9%	80.7%	77.8%	82.2%	78.3%
国語の勉強は好きですか	61.1%	54.0%	58.3%	51.1%	60.5%	52.8%

この結果を見ると「国語の授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、肯定的に回答し

ていた子どもたちは約 78%いる。一方で「国語の勉強は好きですか」という質問に対して、肯定的に回答している子どもは約 53%にとどまっている。このことから、授業の内容は分かるけれど国語が好きではないと考えている子どもたちが少なからずいるということがうかがえる。

好きではない理由はさまざまに考えられるが、その一つに、子どもたちが、国語の授業の中で、自ら課題を解決したい、新たな課題に挑戦したいと思えることが、まだまだ少ないことが挙げられるのではないだろうか。「好きこそものの上手なれ」ということわざがあるように、国語の力を付けるには、国語が好きだと思える子どもたちを育てていくことが重要である。国語の学習の中で、「自分の課題が解決できた」と課題を解決していくことのおもしろさや楽しさを感じ、さらに自分の新たな課題の解決に向かっていく子どもたちを育成することが国語科の課題である。

(3) 研究主題の設定

昨今の社会で求められていることや、香川県の子どもたちの実態における課題から、一人一人が、国語が好きだと感じ、自ら課題に向き合い、国語の力を伸ばし、さまざまな場面で生かそうとする、そのような子どもたちを育てる国語の授業を目指すことが大切だと考え、研究主題を「子どもが自ら学ぶ国語科学習の展開」とした。

「子どもが自ら学ぶ」姿とは、子どもが、国語に対する関心を高め、話したり、聞いたり、書いたり、読んだりすることに没頭し、友達と協働しながら、課題の解決に向かっていく姿である。これは、単に一単位時間、一単元の中で留まるものではない。単元内で、ある課題が解決された後も、その単元、その授業でどのような力が付いたのかを自覚し、さらに新たな課題を見つけ、身に付いた力を生かして、その新たな課題解決に向かっていくのである。

子ども自身が、身に付いた国語の力を自覚し、「〇〇の力を生かして△△の課題解決もしてみたい」等と、国語の時間のみならず、他教科や実生活の中でも主体的に繰り返し生かしながら、課題を解決していこうとする子どもを育成していきたいと考えたのである。

2 研究副主題について

(1) 付けたい力を明確にする

昨年度の国語部会香小研夏季研修会での参加者をみると、教職経験年数が5年未満の国語部員の割合が約3割、10年未満は約4割(アンケートの回答を基に研究部が分析)と、若年層の教員の割合が増えていることが分かった。その中には、「付けたい力をどのように子どもたちに付けたらいいのか、日々悩んでいる」「付けたい力をどのように設定し、子どもたちにどう教えていけばよいか学びたい」というような、付けたい力を子どもたちに身に付けさせるために、どのようなことに留意して単元や一単位時間の授業を構成していけばいいのかという悩みがあることが分かった。

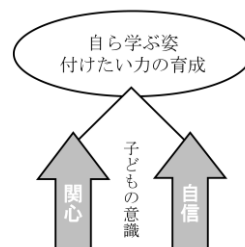
これまでの研究でも大事にしてきたように、これからの学習指導においても、学習指導要領に示されている「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」を基に、付けたい力を明確にすることは、限られた授業時間の中で、国語の力を付けていくためにとっても重要である。また、教師だけでなく、子どもたち自身も、どのような力を付けるために学習しているのか、という具体をもち、学習を進めていく中でその力を育てていくという意識を大切にしたい。

(2) 「関心」を高めたり「自信」をもたせたりする

付けたい力を付けるために子どもが自ら学ぶには、まず、その力に対する必要感や意欲が必要である。「課題を解決するためにはこの力が必要だ」「この力をつけたい」と、その力が必要なことを自覚することで、自ら学ぼうと思ひ、学んだことを生かしていこうと思うだろう。このような必要感や意欲を、本論では、「関心」と定義し、付けたい力に対する関心が高めることを目指す。これまで、目的意識のある言語活動を設定する際にも、子どもの関心が高まる活動はないかと模索してきた。しかし、香川県の子どもの実態を見ても、それだけでは、子どもの付けたい力に対する関心を高い状態に保つことは難しいことがうかがえる。言語活動を子どもの興味や関心に応じて設定することは大切ではあるが、さらに、付けたい力に対する「関心」を高めていく必要がある。

また、「関心」と同時に、見通しをもって課題解決をしたり、力が付いたことを自覚したりすることも必要となる。「こうすればできそうだ」という見通しをもって課題に取り組み、さらに「力を生かすことができた」等と達成感や満足感を味わうことで、「もっとやってみたい」と自ら学ぶことにつながるのではないだろうか。このように、付けたい力を付けるための課題解決の過程や、力を付けること、力を生かすことの「自信」を高めていく必要がある。

これらのことから、子どもたちが自ら国語を学ぼうとするために、教師は、付けたい力を明確にし、それに合った教材や単元の構成、支援を工夫することで、単元や一単位時間の授業を通して、付けたい力に対する子どもたちの「関心」を高めたり、「自信」がもてるようにしたりしていく必要があると考える。付けたい力は何か、その力を付けるために、どのように子どもの「関心」を高めたり「自信」をもたせたりするかを、明確にした授業づくりを行うことで、子どもたちが国語を好きだと感じ、自ら国語を学ぼうとする姿を目指していきたい。



3 研究内容

これまでの研究で、その単元における重点指導事項を絞ることや、付けたい力に合った言語活動を充実させること、子どもどうしの関わりを促す支援をすることの重要性は明らかとなっている。これらのことは前提として研究を進める。

また、「関心」を高めたり「自信」をもたせたりするためには、日頃の観察や質問紙調査等から、付けたい力に対するそれらの実態を捉えておくことが重要となる。各単元において、「関心」を高めること、「自信」をもたせること、その両方のいずれに重点を置くのかは、学級の子どもの実態を基に判断していきたい。

(1) 「関心」を高める

子どもが主体的に国語に向き合うためには、付けたい力に対する「関心」を高めなくてはならない。教師から、言語活動として「これをしてみたらどうかな」と課題を投げかけるだけでは、子どもの国語に対する「関心」は高まらない。子どもの生活経験と結びついたもので、子ども自ら「このようなことをしてみたい」と思うような単元の構成や一単位時間の授業を考えていく必要がある。

そのための一つの方法として、子どもの既存の知識と身に付けさせたいこととを比較させ、その違いに気付かせることで、付けたい力に対する「関心」を高めることができると考える。

以下にその実践例を挙げる。

**単元名『文と文との続き方に気を付けて感謝の気持ちを伝えるお手紙を書こう』－「ありがとう」を伝えよう（東京書籍2年）－
付けたい力「文と文との続き方を吟味しながら文章を書く力」**

感謝の気持ちを相手に伝える手紙を書く言語活動を設定した。単元の始めに、「相手に自分の感謝の気持ちがよく伝わる手紙を書く書き方を学びたい」と思い、学習の計画を立てた子どもたちは、まず、感謝の気持ちを伝える手紙の書き方を、複数の手紙の事例から学んでいった。そして、「相手の名前」「伝えたいこと」「自分の名前」という大きく三つを順に書けばよいことや、「伝えたいこと」には、「お礼の言葉」「そのときの気持ち」「これからしたいこと」「今の自分の様子」等を書けばよいことを学習した。その後、「伝えたいこと」に書いているいくつかの文の順序に着目させた。「お礼の言葉」に続く、「そのときの気持ち」「これからしたいこと」「今の自分の様子」等に分類される文は、どの順序で書いてもよいのだろうかということを、例となるお手紙の文と文を入れ替えながら考えていった。その順序について子どもたちどうしが話し合う中で、過去、現在、未来へと時間の順序に沿って書くと、より相手に気持ちが伝わりやすいということに気付くことができた。そして、自分が書く手紙も、そのような順序に気を付けながら書けばよいと、文と文とのつながりを意識しながら、さまざまな相手にお手紙を書くことにつながっていった。

この実践では、子どもたちがお礼の手紙を書く際に、お礼の言葉だけでは、自分の気持ちが十分伝わらない、もっと自分の気持ちを伝えたいと考え、何をどのように書けばよいか学ぶための学習の計画を立てた。そして、学習を進める中で「伝えたいこと」の中には、「お礼の言葉」「そのときの気持ち」「これからしたいこと」「今の自分の様子」等が書けそうだと思っている子どもたちに、それらの文を様々に入れ替えて提示することで、その文と文の続き方の大切さについて気付かせ、続き方を考えながら文章を書くことに対する「関心」を高めていった。相手に気持ちが伝わる文章にするためには、時間の順序を意識して書けばよいことが分かった子どもたちは、「書く文の時間の順序に気を付けながら、もっとたくさんの人に手紙を書きたい」と、多くの手紙を書くさらなる意欲につながっていった。

また、自分の考えと友達のとの違いを明らかにして、子どもたちの知的好奇心を促すような展開も有効な手立ての一つとなるであろう。

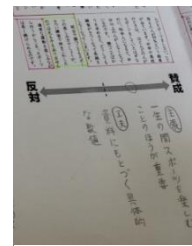
以下にその実践例を挙げる。

**単元名『説得するための工夫を自分の投書に生かそう』－新聞の投書を読み比べよう（東京書籍6年）－
付けたい力「意見文を読んでその意見に対する自分の考えをつくり出す力」**

意見文を読んで、それに対する自分の意見文をつくるという言語活動を設定した。単元の始めに、意見文はどのようなところで見かけるか、話し合う場を設けた。「新聞に掲載されている投書」の他にも「広告」「コラム」等の身近なところにも意見文があることを知った子どもたちは「どのようなところに意見文があるか調べてみたい」と考え、単元を通して、自分たちでそれらの意見文を集めていった。また、教科書教材にある四つの投書を読み、書き手の考えを捉えた子どもたちは、それぞれの投書に対する自分の考えをつかっていった。その際、ペアやグループ、全体で友達と考えを交流する場を設定することで、子どもたちは、一つの投書に対しても、さまざまな考えがあることを実感した。また、友達の意見を聞くことで、自分とは違う考えだけれど納得できたことや、同じ考えの友達の意見を聞くことで、より自分の考えが強くなったことから、自分の考えを交流するおもしろさを感じていった。単元の始めから自分たちで意見文を集めてきていた子どもたちは、自分たちが集めてきた意見文でも、友達と自分の考えを交流したいと考え、単元の後半では、それらについて、自分の考えをつくり、友達と考えを交流していった。

上記実践では、いくつかある投書の中から、同じ投書に対して自分の考えをつかった子どもどうしでペアやグループをつくり、交流する場を設定した。そうすることで、同じ意見文を読んでいるのに、それに対する考えが全然違うという、自分の考えと友達のとの違いに気付かせたのである。そうすることで、「もっと自分の考えを聞いてほしい」「友達の考えを聞いてみたい」と自分の考えをつくることや、その考えを交流することにおもしろさを感じ、さまざまな意見文に対して自分の考えをつくることに対する「関心」が高まった。そして、他の意見文でも、自分の考えをつくりたいと思い、授業時間以外でも、掲示されている意見文について話し合う姿が見られるようになった。

この実践では、単元の始めに、「身近にどのような意見文があるか集めたい」という意識をもたせておき、子どもたち自身が実際にさまざまな意見文を集めていた。このような、学習内容を自分たちの生活に結びつける単元の工夫も「他の意見文も読んで自分の考えをつくって交流したい」と思うことにつながる大切なものである。また、友達と自分の考えを交流する場面では、自分はその意見に賛成か反対かという度合いが視覚的に分かる「賛成メーター」を使用した。このような教具による支援も、自分の考えをつくることに対する「関心」の高まりにつながったと考える。



【賛成メーター】

このように、子どもの既存の知識と新たに身に付けさせたいこととの違いに気付かせることや、付けたい力に関連した自分の考えと友達の考えとの違いを明らかにすることは、国語に対する「関心」を高めるのに有効である。また、これまでに研究してきた、付けたい力について、子どもたちの考えがあいまいな状態を明らかにし、それを解決することに「関心」を高めることも考えられる。これらのような国語への「関心」を高める場面を設定することで、子どもたち一人一人が主体的に国語に向き合うことができるようにしていきたい。さらに、この他にも、「関心」を高めるために、どのようなことができるのか、今後探っていきたい。

(2) 「自信」をもたせる

「関心」を高めると同時に、付けたい力に対する「自信」をもたせることも、主体的に国語に向かうためには必要である。何事も「できそうだ」という「自信」がないと、その先には進みにくいものである。では、どのように、「自信」をもたせることができるだろうか。

一般的に「自信」をもたせるためには、成功経験を積むことが挙げられる。国語の学習に当てはめると、学習したことを使って、話すことができた、書くことができた、読むことができた、という成功経験を積むことが、国語に対する「自信」をもつことにつながると考えられる。それぞれの単元の中で、このような成功経験を積む機会を複数回設定することで、付けたい力が身に付き、その課題解決に対する「自信」をもつことができるだろう。

以下にその実践例を挙げる。

単元名『段落どうしの関係に気を付けて解説文を書こう』－『自然のかくし絵』（東京書籍3年）－
付けたい力「段落相互の関係に注意して自分の解説文の内容を吟味する力」

自分が本で見つけた擬態する昆虫の素晴らしさを解説文で2年生に伝える言語活動を設定した。自分が伝えたい擬態する昆虫を選んだ子どもたちは、解説文で伝えるために、まず、教科書教材の『自然のかくし絵』を読み、擬態している昆虫の素晴らしさについて分かりやすく伝えるための工夫を学んだ。そして、その工夫を生かして、自分が選んだ擬態する昆虫について、2年生に紹介する文章を書く活動に取り組んだ。その際には、先に学習した、『自然のかくし絵』のトノサマバッタの例から「問い」「具体例」「答え」3段落構成で書けばよいことを生かし、まず、コノハチョウを例に「具体例」と「答え」の段落を全員で書き進めていくことで、それぞれの段落の役割や書き方を確かめた。こうして、自分でも書くことができそうだという自信をもった子どもたちは、さらに「問い」「具体例」「答え」という段落どうしの関係に気を付けながら自分が書こうとする昆虫の解説文を書いていった。

このように、単元内で「できた」「自分でも書けそうだ」と思える機会を増やすことで、子どもが国語への「自信」をもつことにつながり、終末には、「もっと他の擬態する昆虫でも解説文を書いてみよう」と、さらなる活動へとつながっていったのである。この事例では、学習内容の難易度や、子どもたちの実態を鑑みて、少し簡単な課題を全員で確かめながら解決し、そして徐々に難しい課題へとスモールステップで取り組む機会を設定することで、子どもたちが「自信」をもつことにつながっていったが、必ずしもそのような場合ばかりではないだろう。例えば、解決すべき課題

と、子どもの実態に応じて、同じような難易度の課題に複数回取り組む時間を設定することも考えられる。ただ、子どもの実態として、高い課題を解決できそうであるのに、あまりにも難易度の低いものから取り組むような単元の構成にすると、逆に「関心」が低くなったり、「自信」をもつことに効果が見られなかったりすることがあるという点には留意しておかなければならない。あくまでも、子どもの実態をしっかりと見取って、子どもの実態に合った単元を構成することが重要である。

この他にも、既習事項とのつながりを実感できるような単元の構成をすること、教具を工夫したりすること、身についた力が実生活で生きている実感をもたせること等でも、「自信」をもたせることにつなげることができるだろう。

4 今年度の研究の重点と今後の方向

これまで述べてきたように、付けたい力に対する「関心」を高めたり「自信」をもたせたりすることで、単元を終えても、学習してきた国語の力を、さまざまな場面で発揮しようとする姿を目指していく。これまで紹介してきた実践は、ほんの数事例であり、これが全てではない。これから研究を進めていくにあたり、付けたい力を育成するために、付けたい力に対する「関心」を高めたり、「自信」をもたせたりする単元の構成や授業の中での支援を見いだしていきたいと考えている。また、子どもたちの「関心」や「自信」をどのように見取っていくかという点も、実践を重ねる中で、今後探っていきたい。

＜平成 30 年度の研究＞

○付けたい力を明確にし、その力につながる、「関心」を高めたり、「自信」をもたせたりする授業実践を積む。